

研究課題：がん医療における医療と介護の連携のあり方に関する研究

課題番号：H19・がん臨床・一般・011

主任研究者：帝京大学第3内科 准教授

小松 恒彦

#### 1. 本年度の研究成果

がん医療における医療と介護の連携のあり方を提示するために以下の研究を行い成果が得られつつある。

##### (1) 介護が必要ながん患者の実態調査

茨城県内94訪問看護ステーションに、がん化学療法等が行われている患者の有無と、対象となる患者で同意が得られた方へは個別の状況についてのアンケート調査を行った。現在結果を集積中であるが、がん治療を受けながら訪問看護も受けている方からの回答も20件近く集まっている。背景や病状、本人や家族の希望は様々であり、解釈や今後の展望は最終的な結果が確定してから論じるべきであるが、結果の如何に関わらず、がんにおける医療と介護の連携を研究する上での重要な基礎データとなる。

##### (2) 米国における高齢がん患者の治療状況の調査

米国テキサス州MDアンダーソンがんセンターのNaoto Ueno准教授と数回面談し米国の状況を聞き取り調査した。米国の医療制度は州による違いがあるが、テキサス州においては、そもそもMDアンダーソンがんセンターを受診するがん患者は、治療の意思とそれに応じた費用（民間保険も含む）を有する人である。個人毎の背景の差が著しく、国民皆保険制度の日本とは状況が大きく異なることが判明した。また米国では、がん治療に関する多くの臨床試験が行われており、治療の手段が限られるがん患者でもリスクを承知した上で試験に参加し、希望を持ち続けることが可能である。以上より新規医療開発が盛んな事は美点であるが、医療・介護制度は日本とは大きく異なり、国家制度としての導入には国民全体の合意が得られにくいと考えられた。

##### (3) がん患者や家族の要望を取り入れるための施設がん患者会の設立

がん医療における医療と介護の連携を円滑に運用するための方法を確立するには、医療供給者側のみによる研究ではなく、直接、がん患者や家族の意見・要望を取り入れる必要がある。平成18年12月、筑波記念病院において主に血液がん患者・家族が参加する患者会が設立された。平成19年4月以降に本研究への協力を要請、医療者と患者という垣根を越え、ともにより良いがん医療を目指す、真の「患者参画型医療」構築の第一歩と考えられる。患者会に業務として看護師等が参加することによる利点・問題点に関する発表が看護学会で行われるなど一定の成果が現れている。

##### (4) 高齢者にも負担の少ないがん医療の実践

前立腺がん、膀胱がんは高齢男性に多いがんである。分担研究者が運営するまなベクリニックでは、通常入院が必要な表在性膀胱がんの経尿道的手術や前立腺生検を外来通院のみで可能とした。また、前立腺がんのホルモン療法、腎がんのインターフェロン療法等を外来で行い、高齢がん患者が終末期まで在宅・地域で適切な介護を受けて過ごせるような試みを行っている。

### (5) 高齢がん患者における理学療法確立への試み

筑波記念病院で同種造血幹細胞移植を受けた 65 例について後方視的解析を行った。31 例 (48%) が移植リハビリを受け、多くは高齢者で骨髄非破壊的前処置による移植が行われていた。少数例の結果ではあるが、予防的理学療法により身体的・精神的な生活の質が保たれた症例は予後良好な傾向が認められた。これらの結果を基に、がん患者における理学療法の前方視的研究を予定している。また、「茨城県回復期リハビリ病棟の会」「茨城の訪問リハビリを考える会」「茨城県介護老人保健施設協会リハビリ専門委員会」等に参加し、介護保険施設や在宅でのがん患者の理学療法を研究・実践するための場の確保を行っている。

## 2. 来年度以降の研究計画

### (1) 高齢がん患者における標準的ながん治療と緩和医療の提示、普及

介護が必要ながん患者にがん治療・介護が十分に行われない背景には、がん治療には高度の専門性が必要で、治療に伴う血球減少などの副作用への対応が在宅や施設での介護では困難である、という不安を医療者・介護者・患者・家族が有している事があげられる。しかし急性白血病など「寛解」を目指す化学療法を除けば、外来で行われるがん薬物療法は在宅や介護施設でも十分に対応可能である。化学療法および副作用対策や緩和医療をクリティカルパスなど分かりやすい形式で提示し普及する必要がある。ただし従来のパスは一定の形式がなく、医療者以外には理解が困難である。我々が作成したパスを土台に、メディア、デザイン、web 作成等を専門業者に委託し、洗練された一般人にも理解しやすい形式でパスを統一し、それらを web 上で公開し、広く国民が標準的ながん化学療法や緩和医療の方法を入手できる事を可能とする。がんに対する心理的抵抗感が薄れ、高齢がん患者が医療と介護を適切に受ける土壌が養われると考えられる。

### (2) 欧州・アジア・豪州におけるがん医療における医療と介護の状況調査

高齢化社会の到来は、日本を始め韓国、中国などのアジア諸国でも喫緊の課題である。日本における取り組みが先例となる可能性とともに、アジア各国の状況を知った上での対策立案が必要である。高齢化により看護・介護の担い手も減少するため、外国人労働者受け入れの是非を検討する必要がある。欧州・豪州は米国と異なり、様々な医療・介護体制を有する国々である。それらの状況を調査し本研究の成果に取り入れる事は、日本のがん医療・介護の向上に益すると考えられる。

## 3. 倫理面への配慮

本研究は臨床研究に関する倫理指針 (平成 16 年厚生労働省告示第 459 号) に基づき行われる。個人情報の調査ではヘルシンキ宣言を遵守し、患者本人・家族に説明同意文書の内容を極力わかりやすい言葉で説明し、説明同意文書 2 部を作成して患者本人・家族に渡した上で文書による同意を得る。説明同意文書に本人・家族の自由意志で同意の署名がされた後に、この文書の 1 部を本人・家族に提供することで倫理性を保証する。患者情報はプライバシー守秘に関して十分な配慮が必要である。個人情報を取り扱う場合、本研究では研究計画を研究分担者施設の倫理審査委員会の承認を得て実施し、個人情報保護法に準拠して扱う。

4. 論文：該当なし

5. 学会・研究会等発表

- 1) 齊藤秀之、小松恒彦、小関 迪、「筑波記念病院における移植リハビリテーションの現状」、茨城造血細胞移植看護ネットワーク、2007
- 2) 齊藤秀之、小松恒彦、「高齢がん患者における理学療法」、帝京ちば血液・移植勉強会、2008
- 3) 安達さゆり、児玉有子、他4名、小松恒彦、「患者会」の病棟ナースへの影響、日本看護学会総会、2007
- 4) 渥美弘美、他4名、小松恒彦、クリティカルパスを利用した血液内科化学療法における薬剤師の取り組み、茨城薬剤師研究会、2007
- 5) 小松恒彦、鞍馬正江、齊藤秀之、他5名、DPC 対応パスと IT を用いたチーム医療と患者教育の実践、医療マネジメント学会・山口九州大会、2007

6. 研究組織

①研究者名	②分担する研究項目	③最終卒業学校・卒業年次・学位及び専攻科目	④所属機関及び現在の専門(研究実施場所)	⑤所属機関における職名
小松恒彦	研究総括者	筑波大学 昭和63年、医学博士 血液腫瘍学	帝京大学第三内科(血液)	准教授
小関 迪	医療・介護施設経営者としての医療経営の研究	福島県立医大 昭和40年、医学博士 内科学	医療法人社団筑波記念会、内科(循環器)	理事長
眞鍋文雄	がん患者の診療所におけるケアの研究	筑波大学 昭和63年、医学博士 泌尿器科学	まなベクリニック、泌尿器科	院長
中田善規	医療と介護の連携に関わる情報管理の研究	東京大学 平成2年・医学博士 イェール大学大学院 平成8年・経営学修士 麻酔科学	帝京大学医療情報システム研究センター、麻酔科	センター長 教授
堀 光雄	がん患者における地域医療連携の研究	筑波大学 平成元年、医学博士 血液腫瘍学	茨城県立中央病院・茨城県地域がんセンター・臨床検査部、血液内科	部長

①研究者名	②分担する研究項目	③最終卒業学校・卒業年次・学位及び専攻科目	④所属機関及び現在の専門(研究実施場所)	⑤所属機関における職名
米野琢哉	医療統計に関わる研究	筑波大学 平成2年、医学博士 血液腫瘍学	独立行政法人国立病院機構水戸医療センター・血液内科	医長
斎藤秀之	がん患者の理学療法に関わる研究	筑波大学大学院 平成14年、医学博士 理学療法学	医療法人筑波記念会 筑波記念病院リハビリテーション部	部長
久保谷美代子	がん在宅医療・介護の研究	戸田中央看護専門学校、昭和59年 看護学	医療法人筑波記念会 つくば訪問看護ステーション	所長
児玉有子	がん患者看護における地域医療連携の研究	佐賀医科大学大学院 院 平成12年、看護学修士 看護学	東京大学医科学研究所探索医療ヒューマンネットワーク部門	リサーチフェロー
井上範江	がん患者における看護介護連携の研究	熊本大学 昭和46年 保健学博士 看護学	佐賀大学医学部看護学科	教授
鞍馬正江	研究補佐	東京大学 平成元年、薬学修士 薬学	筑波記念病院つくば血液病センター	次長